
携帯妖精

五条アリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯妖精

【Nコード】

N1550G

【作者名】

五条アリカ

【あらすじ】

「妖精、いきませんか？」そんな一言から始まった、おかしなおかしな物語り。きっとコメディ、ついでにラブ。そんな話。

第一話「妖精、いりませんか？」

子供のころ、俺は物に命が宿ると教わって生きていた。土にも、木にも、そしてきつと機械にも。

この物語は、とある出会いの物語り。とつとつと、ろろろつと、積み上げられた日常の物語り。

俺が彼女に出会ったのは、吹き付ける風が痛む十二月。世界で一番の成功者が生まれた前日、二十四日のことだった。

その日は雨が降っていた。

「あゝあ、もうちつと寒けりゃ、ホワイトクリスマスになるのに…もったいね」

雨だれで滲んだ窓越しに外を眺めて、俺は小さく息を吐いた。空は雨模様、気温は一桁だろう。けれど、大通りに面したアパートからは、駅へ流れる沢山の傘が見てとれた。

今日は聖夜。街灯とイルミネーションに彩られた街は、夜の帳をこじ開けて、今が盛りとばかりに輝いている。

二輪咲きの傘の群れを見送って、俺は黙ってカーテンを閉める。「さうて、メールは届いてないかな？」

我ながら、悲しくなるような台詞を吐いて、余計悲しくなることを承知で携帯を開いた。

新着メールが一件届いています

「おっ!?!」

一も二もなくメールを確認する。

件名:【お買い得】今ならロリックスの時計が五千円で!

スパムだった。

「……ちくせう」

るろくん、と。どこか遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

「むなしい」

暖房がきいた部屋の中で、心だけが北風にさらされているように寒かった。

俺だって、年に一度のクリスマスに、好きで一人モ 鉄大会を開催してるわけじゃない。顔も知らない聖人の誕生日にかこつけて、誰かとクリスマスを過ごしたい。

だけど。

「相手が居ないんじゃないあ……」

本日何度目かのため息を零して、またテレビの画面に向かう。

「おいっ、キングボ ビー憑いてんじゃない！」

どうやら、モ 鉄にまで寒い思いをさせられそうだ。世の中甘くないと、ゲームにまで諭されてるようだった。

「ちくしょう……なんで俺はこんな日に独りでゲームしてんだ。俺にだって相手が居たって……」

コントローラーを操る手は止めず、呪詛めいた声を絞り出す。だが、現実が揺るぐことはなく、ゲームの中では土地を全売りされていた。

「相手が……土地が……」

不意に携帯電話が震えた。

リリリリリリ。

数瞬遅れて着信音が鳴り始める。設定が面倒だからと、着信は初期設定の味気ない電子音のままだ。

「……またお袋か？」

二つ折りにされた携帯を開いて、ディスプレイを確認する。

090-****-****

着信者の名前は表示されていない。アドレスには登録されていないということだ。だが、この番号にはどういわけか見覚えがあ

った。

「はい、どちら様ですか？」

「め、メリークリスマスっ！」

電話を切った。

リリリリリリ、リリリリリリ、リリリリリリ。

「あの、悪戯はお断りなんですけど……」

「いえっ、そのっ、悪戯とかじゃなくてですね……えっと、よっ妖精一人いりませんかっ？」

まるで、八百屋で大根でも売するような口上だ。

「家は謙遜なゾロアスター教徒なんで。宗教の勧誘はちょっと」

「うあ……そんなんじゃないんです。実はもうあなたの家の前に居るんです！」

「恐っ！ 悪戯ですね、切りますよ！」

あまりにしつこい悪戯電話に苛立つて、つい声を荒げる。

「ひう……あの、妖精、いりませんか？」

電話口から聞こえる声が震えていた。

なぜだろう、ほんの少し胸が痛む。なんともおかしな気分だった。被害者は一方的にこっちはずなのに、俺の方が悪者にされている。その自覚があつてなお、感じるのは罪悪感なのだ。

「話を聞くくらいなら」

だから、こんなことを訊いてしまったんだと思う。ほんの些細な気の迷いが、これから先の俺の人生を大きく変える、なんて思いもしないで。

「ほんとですか！ じゃあ、今からそちらに伺いますね」

「ここに……？ なんで？ 電話で言えば……」

「それでは失礼します。明日までには伺いますので」

「ちよつと待て！ ここに来るって」

チツ、と。鼓膜を突かれるようなノイズと共に、電話が切れた。

慌ててリダイヤルする。しかし、受話器からは話し中のツーという音が聞こえるばかりだった。

「……えっと。悪戯、だよな？」

相手の目的も、なぜ俺に掛かってきたのかもわからないが、誰かに話すにはあまりにも馬鹿馬鹿しい話だ。下手すれば、俺の精神まで疑われかねない。

「……寝よ」

時刻は未だ九時を回ったばかりだったが、もう今日は何もする気が起きなかった。

「クリスマスは中止になりました……と」

テレビのスイッチを切つて、そもそもと布団に潜り込む。一瞬、冷やりとした感触が背筋を舐めた。しかし、それも束の間。次第に俺の意識は、深いまどろみの中へと引きずり込まれていった。

「の……はよう……います……あの……」

声が聞こえた。女の声だ。どこかで聞いたことがある声。

「もう八時回つてますよ？ 学校に行かなくていいんですか？」

「い……いんだよ。今は……冬休み……って」

布団を跳ね飛ばす。

「あ、おはようございます」

温和そうな微笑みを浮かべて、少女が一人、俺の隣に座っていた。季節外れな白いワンピースを着た、黒髪の少女だった。

「うえ……あ……お……誰？」

「はい。携帯妖精のレナと申します。昨日の電話、覚えてますか？」

「電話つて……あれ……？ 悪戯じゃ」

自分の頬が引きつるのがわかった。

「悪戯、ですか？」

少女の顔に、軽い困惑が浮かんでいた。なんだ、要は俺が悪戯だと勝手に決め付けていただけか。

「どうやって中に……鍵は閉めて……」

「えっと、そこから」

少女が、枕もとの携帯電話を指差す。

「は？」

「ちよつと失礼しますね」

彼女の指が携帯に触れる。

一瞬、少女の姿がぶれた。そのまま、陽炎のように彼女は携帯に吸い込まれる。

「なっ!？」

リリリリリリ。

携帯を取り、電話に出る。

「わかつていただけましたか？」

「お前……人間じゃねえ」

「はい。妖精ですから」

どことなく弾んだ少女の声。

その時になつて初めて、彼女が掛けてきた電話番号に思い至つた。ああ、あれは俺の携帯の番号だった。道理でアドレス登録されていないわけだ。

「話を、聞こうか。戻つといで」

彼女の言葉に嘘はなかった。ただ彼女そのものが、俺の常識を遥かに超えていたというだけのことだ。

「本当ですか？ ありがとうございます！」

逆再生のビデオを見ているように、少女がまた陽炎のように俺の前に現れた。

嬉しそうに笑う少女の笑顔は、裏があるようにはとても見えない。窓のサッシには、雪が積もっていた。恐らくは、夜更け過ぎに雨は雪へと変わったのだろう。

「ふつつか者ですが、今日からよろしくお願いします」

「……へ？」

少女が、三つ指ついて頭を下げる。

こうして物語りが動き出す。

ひどくチグハグで、突拍子もなく、馬鹿馬鹿しくて、かけがえ

のない、俺と携帯妖精の物語りが。

第一話「妖精、いりませんか？」（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございます。

重い話を書き疲れて、ラブコメに走った結果がこれです。

一話だけではサッパリですよね、すみません。

一応第一話ですが、第二話があるかは未定です。

続くかなあ………続くといいなあ。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1550g/>

携帯妖精

2011年1月27日14時15分発行